

シラス台地の昔といま

鹿児島市立西紫原中学校 亀澤 宏也

1 シラスと南九州

鹿児島県の大部分と宮崎・熊本両県南部には、保水性が低く有機物を含まないやせた火山性の土壌であるシラスが広がる。九州南部に住む人々の暮らしは昔からシラスとは切っても切り離せない関係にあった。一般に、シラスとは、火山灰が積もったものであると考えられがちであるが、実際は、数万年前から数千年前にかけての火山による火砕流による膨大な量の噴出物が冷えて固まったものである。つまり、『桜島の降灰≠シラス』ということになる。

今回は、南九州最大のシラス台地として有名な笠野原台地における土地利用の変化を考えていきたい。

2 笠野原台地と高隈ダム（大隅湖）

笠野原台地は、大隅半島の中央に位置し、約6000haの台地である。台地南部は標高約20mほどであるが、台地北部では標高約180mにもなる。シラス特有の水を通しやすい(=貯めておくことができない)という特徴から、地下水面が非常に深く、台地上では、50~80mの深井戸を掘らねばならなかった。左の地図中の『土持堀の深井戸』は江戸時代後期に掘られた深さ約64mの井戸で、鹿児島県指定史跡となっている。このような深井戸では、一人の力では水を汲むことが困難で、数人がかりや牛などを用いて水を汲んだ。台地上での水の確保はそこに住む人々、開発しようとする人々にとって常に深刻な問題であり、藩政時代から人々の努力は続いてきた。左の地



「中学校社会科地図 初訂版」p.77

図ではさつまいも、なたね、陸稲などが中心であるが、これらは昔からシラス台地の特性に合った作物であった。1955年からは国営第一号として畑地灌漑事業が実施され、右の地図中の高隈ダム（大隅湖）が建設された。こうして、1969年に国営事業は完工した。これにより、台地上には水がパイプラインによって供給された。灌漑事業完了後の右の地図では、飼料作物を中心に、野菜づくり（露地・ハウス）など、商品作物への転換が見られ、畜産もさかんに行われているのがわかる。食生活の多様化で肉類の消費が増えたことや大手企業との契約もあり、今後ますます日本の食料基地としての役割が増すと考えられる。

3 笠野原台地と鹿児島黒牛・黒豚

右の地図を見てみると多くの牛や豚の記号が見られる。鹿児島では明治時代から畜産試験場を設立し、牛や豚の改良を重ねてきた。飼料にシラス台地で作られたさつまいもや芋焼酎の搾りかすを混ぜることにより、ほどよく脂の乗った上質の肉質になり鹿児島黒牛・黒豚として全国的に人気も高い。シラスが広がり、農業に不向きだった台地も、シラス土壌に合ったさつまいもと畜産が結びつき、また人々の努力の成果により『畜産王国』と呼ばれる地位を確立したといえるだろう。